してゐるかも承知してゐる。（略）」。

古典からの血統とその課した責務と、古典に憧憬を抱けばそれだけ受動的に懷疑と現実喪失を意識させ、民衆からの遊離を感ずるだけの彼の現代だつたのである。彼がその設定に於て、いかに民衆とのつながりを心に配つたことかそれは芥川龍之介が、その文学が、日本近代文学に於て大きく評価されなければならない。その限りにおいて彼は永久に民衆と密であつた。

意識の問題 ‖日本近代文学思想史序‖

木戸清平

歴史を通じて考えられることは時代の転換にあつては前後を通じて混乱空白時代が介在し、暗黒時代の溝が横たわることである。江戸時代の末期（弘化嘉永以後）から明治時代初期（十年頃迄）はまさに文学史上の暗黒時代であつた。

「我国文学史上に空前の盛観を誇つてゐた江戸文学も、天保弘化嘉永の間に最後の巨匠大家を続々失つて、維新前二十年の頃には、全く生気のない墓穴のやうになつてしまつた。

和歌では絶代の巨匠香川景樹の亡くなつた後を承けて、その門人八田知紀熊谷直好などが現はれたが、たゞ先師の環蔽にのみ汲々としてわずかに桂園一派を支へてゐるだけであつた。

俳句には天保時代の宗匠梅室、蒼虬鳳朔などを最後として、独創新鮮な生気を持つものが全くなくなつてしまつた。俳諧趣味は全国の津々浦々まで普及してゐながら、たゞ追従のみをこと、して、独自の境地を開拓して行くほどの者は一人も現はれなかつた。

浄瑠璃には広雲、半二の死後特に推新するほどの者なく、脚本には、新七（古河黙阿弥）二三名、名助、如祿などが現はれたが、いづれも五瓶、南北などの亜流以上のものではなかつた。

小説では蘭馬琴の死後全く人物なく、たゞ下劣な戯作者達が読者の安易な欲求を満たしてゐたに過ぎない。

人情本の方でも、為永春水、十返舎一九の没後は、殘薄極まる滑稽本に逃避して、新鮮な筆を見せる者が全然なくなってしまつた。

その他、俳文、狂歌、川柳なども、ひとしく情勢と模倣との泥沼に喘えぐより他に道がなかつた。」（梶原勝三郎「明治維新前後の我文壇」春陽堂月報五十一号）は多少の誇張を割引しても江戸末期の大勢をうかがうことが出来よう。このような文壇自身の混迷に加えて、大きな社会変革がなされたのであるから空白の生ずるのも止むを得なかつたといえる。更に悪條件として忘ある者が当時の実利思想「詩を作るより田を作れ」に動き、政界に飛び出し、その志の達せぬ者はジャーナリズムの世界で活躍して全て、文壇を顧みる人間のなかつたことであつた。これが後人をして混沌期などの名称をつけさせた所以であろう。

私はこのような事実からいかにして近代文学が誕生したかを思想的に見て行こうとするのである。

近代文学誕生に当つて問題となるのは意識である。時に現象となつても意識なきところにはいつか消滅してしまう思想を考えても無知のものが無意識に行動した事実は史的存在になり得ぬし、哲学者、思想家等の空想的理論でも社会意識になり得ない。社会事情なり無自覚な社会意識を哲学者思想家が意識として取りあげ一般大衆に自覚させた時思想が生ずるのである。文学に於ても近代文学に対する意識が問題になる。この意識が残念乍ら明治初期にはうすかつたのである。明治十年迄では実際文壇には近代文学意識は見当らない。ただ従来のまゝではいけないという意識はあつた。何かフレッシュなもの、そして新政府の下につくられて行く新時代にアピールするものといつたものはあつた。「西洋道中膝栗毛」（三年九月）「安愚楽鍋」（四年十二月）「坪瓜遺」（五年）を書いた假名垣魯文である。兎角世人は戯作者などと悪くいいたがるが、「詩を作るより田を作れ　時代にあまり儲かりもしない文学戯作を生涯の仕事として、一つの橋渡しの役を果し得た人達の功績は認めなければならぬ。魯文は新しい理想も持たず、根本的創作態度の変更はないにしても、新知識を吸収して時代におくれまいと努力した熱意は買わねばならぬ。彼は福沢諭吉、岡文紀（赤洋）その他当代の新知識、文化的指導者の著訳書を研究している。「萬国・航海西洋道中膝栗毛」を読むと二編上に

作者曰。「海上通路都て飛中の弁理なるは西洋旅案内に委しければ茲に贅せず。航海の便宜を得んと欲せば彼書を

きて概略を知るべし云々」

と書き出し

「天地者萬物の逆旅、光陰は百代の過客なり。而して浮生は夢の若し。歡びを為すこと幾何ぞや。古人燭を秉て夜遊ぶ。良に以有せと。李白が桃李一編の宿帳に落書せしは、所謂一斗の酒興に似たれど。能乾坤の旅情を尽せり。然はあれども文明開化の当時の旅は往古に異りて。萬国世界の親類附合。さるからに陸には蒸気車海河には蒸気船の器械を備へ。自国は庭中を巡るが如く、鬼門関外遠しとせず……」

洋行もせん人間の明治三年という時を考へた時、魯文の努力は賞わねばなるまい。彼は、更に五年「倭国字西洋文庫」（辭訳に非ず）を書き、八年平假名絵入新聞に「ハムレット」紹介（九月七日、九日、十日の第七二号以下三回）をかいている。（但しこれは確証されていない）しかし、いかに彼の努力を認めたくも、意識の点では余りにも情ないものである。自己卑下の態度で読者の機嫌をとる事に汲々としている。「藤棄毛」第三編に「第三編は英須香港の滑稽娼家登楼のをかしみより『センゴン』へ渡海の船路蒲風の一回船中の狼狽なんど引続出版仕候間御評判を希ふ。」に始り、自序「戯作者と娼妓は、虚誕が誠実で真面目が妄語なり。不倫なき草史へ正史へ模擬。字義の分らぬ漢語の声色。解せぬ唐詩の鸚鵡石は。……去頃亡者の蘇生たるに、不計地獄の新聞を得たり。作は中興戯作に声価ありし。京伝馬琴三馬一九の諸大人等、黄泉に羈旅しをり。妄語の葦水滸源氏の古例あれば、忽地修羅の道場へ。追隨されて閻羅の廳に。後生三世唖に為べしと。罪科の決定しに。曲直の判然し一個の冥官。重談に及ぶやう。元来、戯作の戯の字を分てば、虚に女を合せしなり。是相牌に偽なき。虚が実の譬喩方便。事を凡の近に取。義を勧懲に発するものから、婦女童蒙に教示の一偶。是等の有益を罪として。渠等が舌を抜とさは。閻羅王とは貴親類なる。釈迦世尊から抜かねばならず。此以後戯作者の虚談。傾城の妄語は。罪の箇條を除くべし。方今文明開化の姿楽に。倣ひて地獄の酒幣を。一洗せずんばあるべからず。云々」（以下一人一人の罪状をあげた上で）「此新聞の説に因れば。漢中華夷の取沙汰は。支那学士と売僧の妄説と。悟るものから博識ぶりて。正史を引ず放言顕の。虚を実の両洋漢毛。罪は作らぬ戯作者朴訥。近来人車の憂るを見て馬車の誠とする類になん。

辛未歳梅春　　戯草文の假名垣主人識」同五編下には

通「イヤサところが其きたねえ物が極たつといといふ訳はたつた今当人から聞たのだシ、西洋の原書でも見ておいた嘘なら近頃出版する福沢本（魯文註東京の俗間西洋のほんやく書をさして福沢本と唱ふ先生の功大なりといふべし云云」　同自序に

「文を以て友を会するを学者と称へ愚を売つて国を糊するを戯作者と殺けたり……遼莫博く学べる者は有名無実の議論に耽り口に剣銃砲を磨き、舌に戦争を好みて五体洲中平穏ならず。大典は小典を併せ気根の弱きは記憶の強きに制せらる。不如我輩の『小島学園の舌戦を聞とも大声里耳に入らざれば只管局外中立の掟を守り敢て辞議の席に臨まず。滑稽無事の境に潜むも実は文籍の器械に乏しく才力微なるが故にして口に戸ざさぬ初代の思聞のかりがねはづすもあらばはかなき稗史も有用の一具、所謂富国強兵の策の音弁世に通ひて鼓腹冒平の作とや誇らむ

明治四ツのとし辛未の夏のはじめ　かな垣のあるじ魯文しるす」

右の文で二つの意識が考えられる。一つは戯作者の立場を説明している中に、絶迄江戸文学の精神といわれるものを外に出そうとしていることであり、他の一つは既に時代におくれて行こうとするさびしさに伴う消極的役割としての自覚である。江戸文学の精神は文学辞典によつて大別すれば1義理2、人情3、因果応報4判官贔屓5、崇拝6、現実享楽7、好色と粋8通9、滑稽10、エロチック11、猟奇的12風雅の十二にわけられているが魯文の作は確かにこのわくの中から一歩も出ていないことが一目してわかる。しかも彼はこれを極力守ろうとしている。というより脱皮したくも出来ないのかも知れぬが、最後の江戸文学者の一人として彼は彼なりの意地をはつているように思うのである。この中からは決して近代文学意識が生れる筈がない。とはいえ、とにかく筆一本で人生を送ろうと決意した者が少くとも明治二十年後にならねば出現しなかつたことから見ればやはり敬意を払うべきであろう。と同時に魯文そのものからは新文学は誕生せぬ迄も彼の行為を一つの刺戟材として新文学運動が生じたことは認めてよい。後述するが、文学に対する価値判断が実に彼をもつて代表される戯作からなされているが故である。文学有用論、無用論、有害論のいくつかは戯作を対象になされているといつてよい。この問題は問題として残すことにして、魯文の第二の意識を考えてみよう「滕原毛」を出して一年、第五篇は四年の夏出ている。一年間に彼はどのような影響をうけたかはその序の中からうかがえる。明かなことは彼が自分の力の限界を知つたと共に戯作の運命、更に戯作的作家態度に対す自己批判がこつ

たことである。単におもしろいというだけではならない、何か世にプラスするものでなければならぬということである。これはたとえ彼が意識として自覚せぬまでも、亦はつきり把握出来ぬまでも、何かそこにあつたのではないかと思う。これが彼をして外国物の紹介にのりだたせた動機ではなかつたろうか。これをこうしなければ食えなかつたからだと一言のもとにきめつけるには一寸ひどいように思う。然し彼の名は十二年二月「高橋阿伝夜叉譚（あでんやしものがたり）」（或いは夜叉譚）」八編二十四冊を最後として文壇から名を消したのである。桐の葉落ちて秋を知つたかの如く彼は最早や世にいれられぬことを知つて筆をたつたのかも知れぬ。そして明治二十七年世を去つた事を知る者は殆んどなかつた。

然し、文学は作者のみでは成立せぬ。読者があつてはじめて存在するのであるから一般読者意識も見なければなるまい。木商久雄氏「明治文学史」上巻八〇頁に「鳥逗南松海上新話」に対する第一巻所載の序文の序がのつている。

「我假名読新聞第五百四十号客歳十二月十日を以て始めて雅報欄内に記載せし鳥逗阿松の伝は商々本年一月十一日第五百六十二号に至り、翻出する事十四回、未だ結局に及ばざるも、饒俳（さいはい）にして千町萬町の眼目に觸れ、喝采の声価を得たる操觚者の観花の余りに思はず筆を走せたるなり。（以下略）」

実録物が読者に歓迎されたことはこの序でもわかる通り、読者意識も同時に文学の何ものかを考えなかつたのである流行時と共に去る。流行のみ追つた魯文以下戯作者は終に自己を見失つてしまつた。

このような混乱の中から新しい意識の芽生えは既にはじまりつゝあつた。福沢諭吉を筆頭とする一団の意識であつた。それは必ずしも文学者ではない。広い意味の知識者といえよう。そしてそれに続いて文壇意識がもちあがつてくる。

最後に二つの資料を資料としてのせて、次回への橋渡しにしておく。

「……蓋し日本人に取りては支那流の詩は恰も痙の手真似若くは操人形の手踊りの如きものなり痙に生れずして痙の真似をなし人と生れて人形の真似をするもの又烏まざるべけんやそこで我等は連続したる思想内にある訳にもあらず心地よき音調を以て能く鳴ることの出来るものにあらねども全く三十一字や堅くるしき唐詩の出来ざる悔しさに何か一つ　腕組したれとやはり古来の長歌流新体などと名付けるはけたか矢張り自分鬼許の鼻高であつたら面白くもなく訳も分らぬ文句以て訳したものや面白なきものかものせる長文句能く見れば

新体と名こそ新に南ゆれど　　やはり古体の大仏の法螺

法螺と知りつゝこを我よりなさんと下心笑止とこそは云ふへけれ……」（「新体詩序」）

とは外山正一の明治十五年五月の心境であつた。同時に井上哲次郎も

「余蚤ニ新体ノ詩ヲ作ラント欲セシト雖モ、其容易ノ業ナラザルヲ慮リ、先ツ和漢古今ノ詩歌文章ヲ学ビ、ソレヨリ漸次ニ新体ノ詩ヲ作ルノ路ヲ為サントシケルニ、一日尚今居士（矢田部良吉）ハムレツトノ訳詩ヲ示サル、其文恰諧ヲ交フト雖モ、反リテ古歌や漢詩ノ解シガタキニ勝ル、因リテ余之ヲ愛賞シテ学芸雑誌第六号ニ載ス、……」（以上ニ引用文「河出版現代詩大系第一巻」）と明言している。古き者の代表者としての魯文、新しき者の人としての外山正一、井上哲次郎らの意識、ここから新旧二派がわかれて来るように思う。そして魯文から近代文学に移ろうとした一人育蘇緑雨のことばをかりると。

「歳十七八の頃なれば猶昌校に通へりと覚ゆ。われは永機翁の紹介によりて魯文翁に面したり。駒奉鉄に擬したる印一つ賜られしを、用ひこそせざれ、今も蔵せり。いかなる事を書きしか全く忘れたれど携へ行きしわが一文に名を真猿と署し、芳譚と称する雅誌に出されたり。（年代未詳）」（この緑雨の頃大正十五、五蘇村作「育蘇緑雨」引用）

といい、彼自身魯文の門人と称し、

「俗名垣派より出でたりとて、曩に或人のわれを大く恥しめしが、われはこの点に就て争はじ、妨けじ。若し然らば俗名垣派の多くは亡びたるに、われひとりのこれるをせめて恃まんのみ。」

と新を追ふ文学者の中でやせがまんしていた緑雨が　「尠からぬ意をわれの受けしは坪内氏と幸田氏と森氏となり。身にさまゞの障りありて幾度か文壇を退かんと思ひしも、大かたはこの三氏の引留められしなり。」

と南眼し、明治文壇の人間に移行して行く意識の過程を語つている。

意識がやがては思想となりそれが明治の近代文学を動かして行く原動力となつたのは果していつであつたろうか。（未完）

附記　研究は少しも進んでいないと思うが書出しだけしておきたい、柳田泉先生の著書の偉大さに今更おどろいたり悲観している次第です。魯文なども「明治初期の飜訳文学」には詳しくのべられてあります。